

北方町文化財報告書第5集

みなみくぼやまこぼりいせき

南保山小掘町遺跡

平成3年度農村基盤総合整備事業関係発掘調査概要報告書

1992年3月

宮崎県東臼杵郡北方町教育委員会

『南久保山小堀町遺跡』正誤表

頁	行	箇 所	誤	正
1		写真の説明	1. 作業風景	1. 体験学習
1		写真の説明	2. 体験学習	2. 作業風景
4		調査区図の縮尺	(1/)	(1/3,000)
8	21	以下の文章を追加して下さい。	最大長43cm・最大幅31cm・最大厚15cm・重さ24.5kgを計る。	
10		写真の説明	14. 3号土壺(西から)	14. 3号土壺(西から) ～焼土検出状況～
13		29の写真は上下が逆に成っています。御諒承下さい。		
13		写真の説明	30. 4号祭祀遺構出土明鏡	30. 4号祭祀遺構出土古鏡
15	7	以下の文章を追加して下さい	22と23は偏平な砂岩製の円形石器である。用途は不明。 粗い打剥整形の後研磨を施す。大部分自然面が残る。	

南久保山小堀町遺跡正誤表（追加）

14頁 31. 出土石器① No. 1 の剥片先頭器の写真は下の写真に変えて下さい。



1



航空写真



上：遺跡空中写真
(南より)



右：調査区遠景
(北より)

序

現在本町では、豊かで魅力あふれる町づくりをめざし、それぞれの地域にあった経済活性化の基盤づくりを進めております。そして、その施策の一つである農業基盤総合整備事業もここ数年町内各地で進められています。

北方町教育委員会では、これらの開発工事から埋蔵文化財を保護し、調和のとれた町づくりを進めるため、関係機関と協議を行い、遺跡の保存やその発掘調査を実施しています。

この報告書は、平成3年度に実施しました北方町子（南久保山）小堀町遺跡の発掘調査の記録であります。この調査では古墳時代前期の住居跡や中世の祭祀遺構を始め各時代の貴重な遺物を多数発見することができ、当時の人々の暮らしやその地域での文化の形勢過程を知る上で貴重な資料を得ることができました。

調査にあたり、御協力をいただいた関係機関ならびに関係者の各位に対し厚く御礼申し上げるとともに、本書が文化財に対する認識や理解のため、また、研究の資料として活用されることを願うものです。

平成4年3月31日

北方町教育委員会

教育長 河井行雄

例　　言

1. 本書は、平成3年度農村基盤総合整備事業に伴う東臼杵郡北方町南久保山小堀町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、北方町役場農政課からの依頼により、北方町教育委員会が実施した。
3. 調査の組織は以下の通りである。

調査委託者 北方町役場農政課

調査主体 北方町教育委員会

教育長 河井行雄

社会教育課長 三浦弘

調査事務 社会教育課長補佐 水田信義

調査担当 社会教育課主事 小野信彦

調査指導 宮崎県文化課

4. 本書に使用したレベルは海拔高で、方位は磁北で示した。
5. 本書の執筆及び編集は小野が行った。
6. 題字は河野隆氏（北方町助役）の揮毫による。
7. 出土遺物や写真・図面については北方町教育委員会で保管している。
8. 発掘調査及び本書を作成するにあたり、下記の方々に多大な御教示・御協力を頂いた。記して感謝致します。（順不同）

足立富男氏（門川町）、松山正利氏（延岡市）、宍戸章氏（宮崎市）、池田洋子氏・沢皇臣氏（北川町）、近藤協氏（県総合博物館）、永友良典氏（県埋蔵文化財センター）、日高孝治氏（県史編さん室）、宮崎県市町村埋蔵文化財担当者各位、宮崎県文化課埋蔵文化財担当者各位、黒木小夜子氏・佐藤きみえ氏・田口真理子氏・西村有子氏（北方町）、南久保山基盤整備組合、山辺建設及び地元関係各位

目　　次

Iはじめに	1
II調査の内容	4
IIIおわりに	22

I. はじめに

1. 発掘調査の経緯

北方町で農業基盤総合整備事業が開始されたのは、昭和62年度からであった。本年度は南久保山及び笠下黒原の2地区が工事の対象となった。北方町教育委員会では、工事担当部局である北方町農政課より工事担当地区内の遺跡の有無についての照会を受け、平成3年8月27日に南久保山地区の工事予定地内の試掘調査を行った。

この結果、南久保山小堀町地区において遺跡の存在が確認された。北方町教育委員会はこの調査をもとに、工事担当部局である北方町農政課と遺跡の取り扱いについて協議したが、工法変更等による遺跡の現状保存は不可能となり、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成3年11月1日より開始し、関係機関や地元作業員の方々の御協力により平成4年1月31日に無事終了した。調査の結果、古墳時代前期の堅穴住居跡や中世の祭祀遺構を始め、縄文時代後・晩期の土器や石器など重要な資料や新知見を得ることができた。また、調査期間中に地元の小学生や諸団体の見学があり、それぞれ随時説明会をもった。

2. 位置と環境（3～5参照）

北方町は宮崎県の北部に位置し、延岡市の西に隣接する。南北に長い町域のはば89%を山林で占められ、可耕地は五ヶ瀬川やその支流によって形成された段丘上や曾木川周辺に見られる程度である。本町の遺跡は、五ヶ瀬川によって形成された段丘上にも見られるが、ほとんどは曾木川辺の平野部と起伏の少ない台地上に位置している。

南久保山小堀町遺跡は、宮崎県東臼杵郡北方町子（南久保山）^こ小堀町に所在し、遺跡名を南久保山小堀町遺跡と称する。遺跡は五ヶ瀬川が北へ鋭角に曲がる辺部であり、段丘が北へ緩やかに傾斜地に位置する。遺跡周辺は畑地であるが、西側に湧水があり、谷部は水田として利用されている。



1. 作業風景

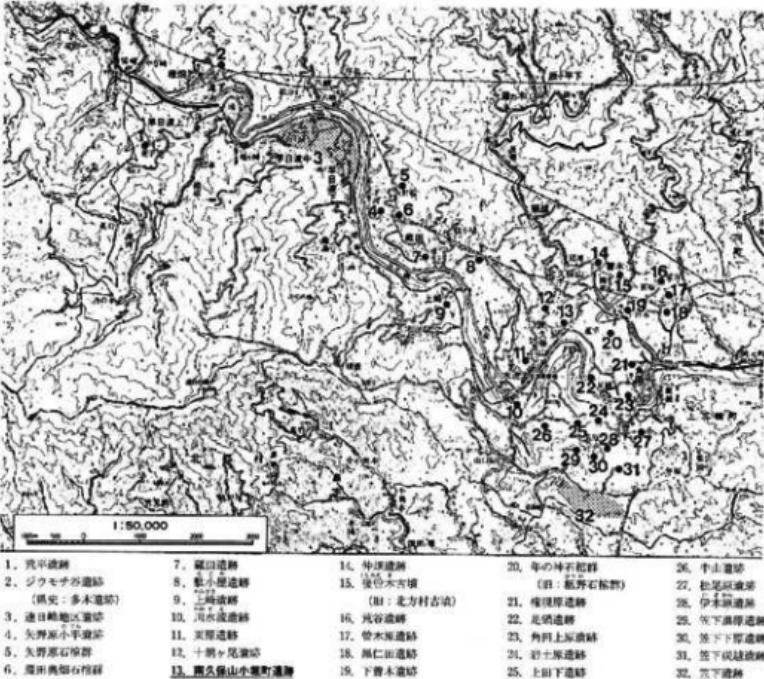


2. 体験学習

次に、周辺の遺跡について概略する。旧石器時代の遺跡としては、本遺跡の南西約1kmの所に東原遺跡が位置する。切り通しのアカホヤ層下の黒褐色土層より、流紋岩製の石核が出土している。また、北方中学校のグラウンドは整地に赤木遺跡の一部と思われる包含層が利用されており、二次遺跡の可能性がある。

縄文時代の遺跡としては、やはり東原遺跡が知られており、石器や押型文土器・磨製石斧等が採集され北方小学校等で保管されている。尾根を一つ隔てた北側約500mの所に十郎ヶ尾遺跡があり、土取り工事によって削られた壁面のアカホヤ層下より集石遺構が検出され、無文の土器片・チャート片等が出土している。また仲畑遺跡からは磨消縄文系の土器が、足鍋遺跡からは西平系の土器と多量の石錘等が表採されている。その他、散布地として下曾木遺跡がある。

弥生時代では、川水流・東原より石庵丁が発見されている。その他、北方町内出土として板付II式の土器と後期初頭の瀬戸内系土器が知られているが、明確な出土地点は不明である。可能性として曾木周辺が考えられる。



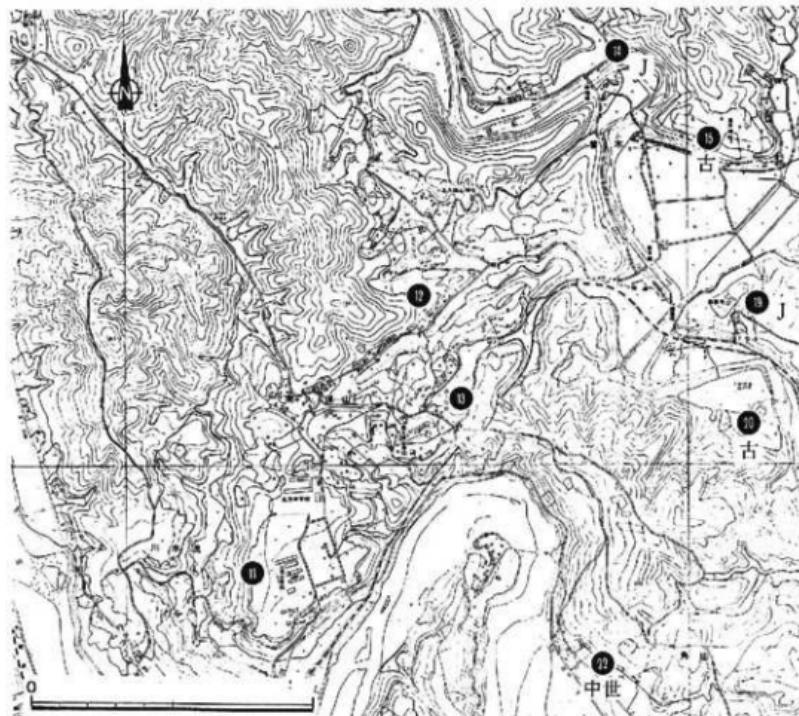
3. 北方町主要遺跡位置図(1/100,000)

古墳時代では後曾木古墳と年の神石棺群がある。後曾木古墳は昭和12年に県の史跡に指定された旧称北方村古墳である。みかん園造成時に数基の箱式石棺が検出され、そのうちの1基からは、人骨や・鉄斧・鎌先・鉈・刀子・剣等が出土している。現在はこの石棺が保存整備され残っているのみである。年の神石棺群は曾木中心部である柳瀬の西方の丘陵上に、7基の凝灰岩製の箱式石棺が確認されている。いずれも後期と思われる。

中世では足綱遺跡より土鍤が発見されている。また、南久保山神社周辺には寄せ集められたと思われる五輪塔がある。慈眼寺にも六地蔵が寄せられている。

参考文献

- ① 田中茂『東臼杵郡北方村の古墳』北方村教育委員会 (1962)
- ② 北方町史編纂委員会『北方町史』北方町 (1972)
- ③ 横山邦雄「石庖丁出土地名表(宮崎県)」『速見考古』第4号、九州先史研究会 (1973)
- ④ 沢皇臣「東臼杵郡北方町出土の弥生式土器」『宮崎考古』第1号、宮崎考古学会 (1975)
- ⑤ 宮崎県『宮崎県史 資料編 考古1』(1989)



4. 南久保山小堀町遺跡及び周辺遺跡(1/20,000)

II. 調査の内容

1. 調査の概要

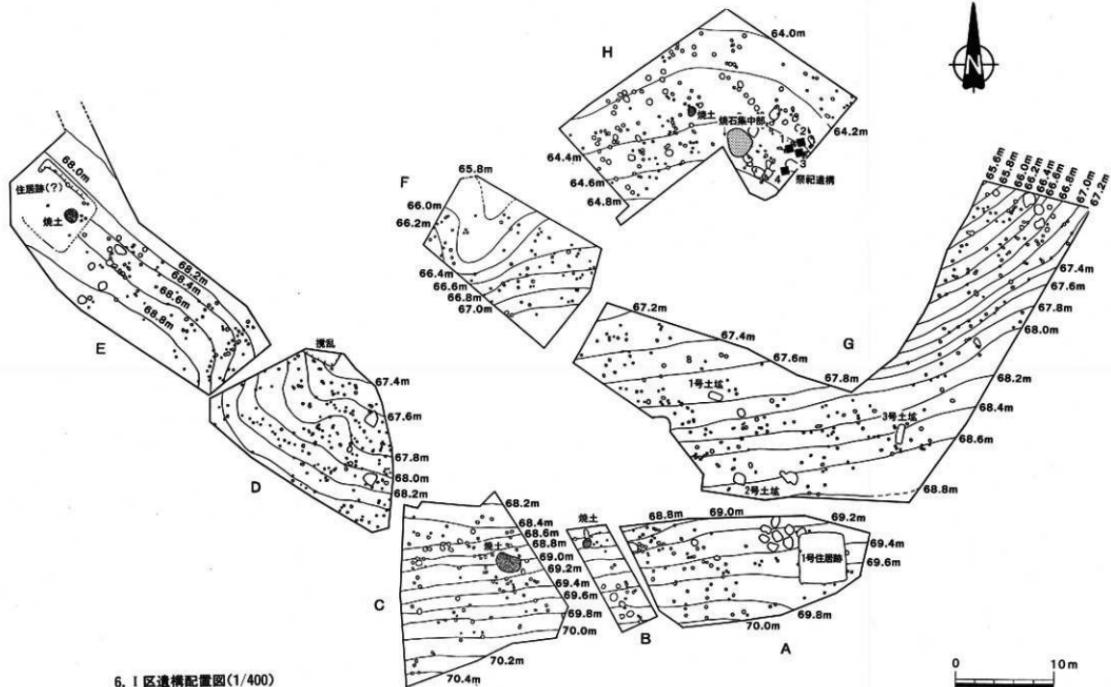
試掘の結果、ほぼ全域でアカホヤ層が確認された。廃土等の問題もあり、工事で削平を受ける部分を中心に調査区を設定し、I区ではA-Hの順に調査を行なった。II区は、調査期間等の問題もあり、アカホヤ層が工事によって影響を受ける東側部分のみの調査となった。

遺構検出はアカホヤ層上面で行った。尚、調査区は北側へ向かってゆるやかに傾斜しており、各調査区の北端は埋土がかなり厚く堆積していた。アカホヤ層の上には、調査区によっては一部削平されている部分もあったが、黒色土の包含層が確認された。主に縄文時代晚期の打製石斧や凸帯文土器等が出土している。

調査の結果、I区では古墳時代の堅穴住跡1基と中世の祭祀遺構4ヶ所の外、時期不明の多数の土塙と柱穴を検出した。また、E区の西端で若干整地された部分と焼土が検出された。住居跡とも思われるが、北側の一部を除き大部分が削平されており、出土遺物もないため詳細は不明である。この外、数ヶ所の焼土集中部を検出した。C区とE区ではアカホヤ層の一部が削平されており、遺構検出時に焼石が出土したので掘り下がたが、集石遺構は確認できずチャート製の石鏃や押型文土器片等が若干出土したのみであった。旧石器時代の遺物は、H区横の排水工事立ち合いの際、VI層中より流紋岩製の剥片尖頭器様石器が1点出土したのみであった。

II区では、北側の一部が既に造成により削平を受けていたが、傾斜部分の土層状況は





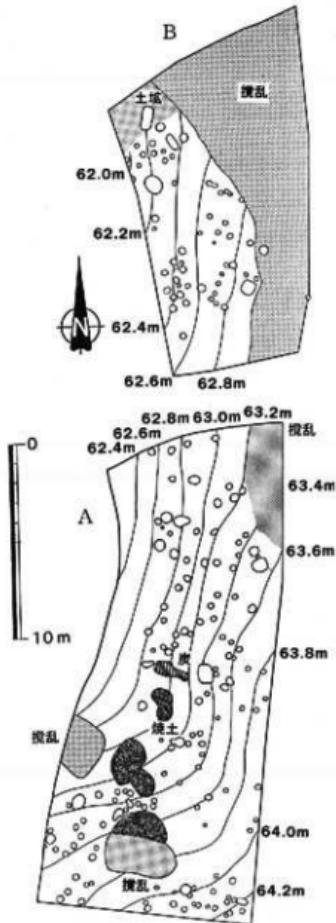
6. I区遺構配置図(1/400)

良好であった。調査の結果、Ⅲ層上面で数ヶ所の焼土集中部を、IV層上面で時期不明の土塙數基及び多数のピットを検出した。遺物は主にⅢ層中より縄文晩期の打製石斧、凸帯文土器等が出土した。その他、古代・中世の土師器や陶磁器等が出土している。

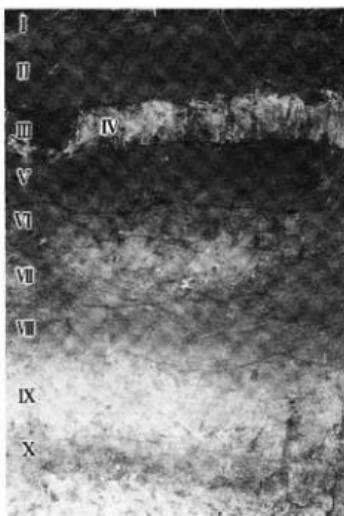
2. 基本層序

基本層序は以下の通りである。

- I 層…表土
- II 層…埋土もしくは茶褐色土層
- III 層…黒色土（バサつく）、約20cm。縄文時代
晩期の遺物等が出土。
- IV 層…アカホヤ層。約20cm。
- V 層…黒褐色土層（粘質）約30cm。縄文時代
早期の遺物が出土。
- VI 層…暗茶褐色土層（粘質、砂利まじり）約
15cm。旧石器時代の遺物が出土。
- VII 層…明褐色土層（粘質、砂利まじり）約20cm。
- VIII 層…暗褐色土層（粘質、砂利まじり）約20cm。
- IX 層…黄褐色土層（粘質、砂利まじり）約30cm。
- X 層…暗黄褐色土層（粘質、砂利まじり）



7. II 区遺構配置図(1/300)



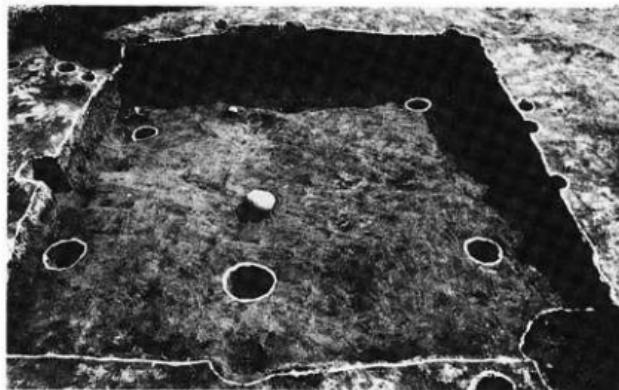
8. 土層図(II区-A)

3. 遺構

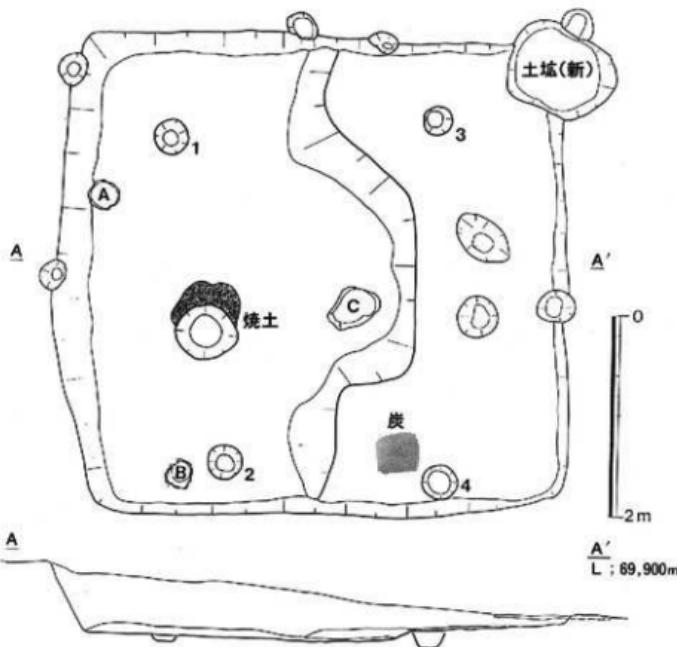
① 堪穴住居跡

I 区のほぼ中央の町道寄りで検出した。本遺跡で検出した堪穴住居跡はこの 1 基のみである。住居の平面はやや隅丸の方形プランを呈する。長辺が約 5.1m、短辺が 4.8m である。壁溝はなく、真中で約 10cm 程の段がつく。中央に花崗岩の巨礫が据えられており、段は礫をさけるように U 字形にくぼんでいる。主柱穴は 4 本で、やや壁際に寄っている。4 号柱穴は壁際にあり、西側に近接して炭化物の集中部が見られる。壁の高さは検出面で最大 80cm を計る。北側へ傾斜していく地形の影響もあると思われるが、北壁は検出面での高さは 10cm 程であった。カマド等の施設はなく、1 号柱穴と 2 号柱穴の中間に長径 60cm、短径 55cm、深さ 10cm 程の円形の土塙があり、西側に焼土の集中が見られたのみであった。尚、住居跡の北西端に直径約 40cm 深さ 20cm 程のほぼ円形の土塙が後から埋り込まれ、周辺にも 7 基の土塙が集中しているが、遺跡物等もなく住居跡との関係は不明である。埋土は住居跡と同じ III 層であった。

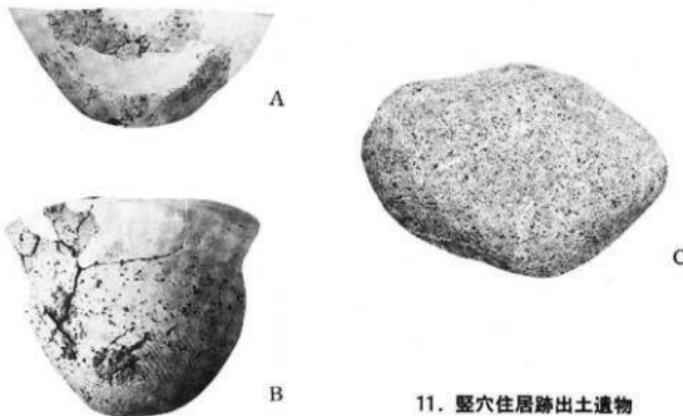
住居内からは、ほぼ完形に近い楕形土器と鉢形土器それに若干の土師器片数点が出土したのみで、石器・鉄器等はなかった。A は 1 号柱穴付近の壁際床面に据えられていた楕形土器である。口径 21cm・器高 10cm を計る。B は 2 号主柱穴の横のやや壁寄りの底面に据えられていた鉢形土器である。胴部はあまり張らず若干くびれた後、口縁がラッパ状に開く。口縁最大径は 1 と同じく 21cm を計り、器高は 15cm である。A・B の調整はともに外器面がタタキで内器面はナデである。C は、中央の床面に据えられていた花崗岩の巨礫である。全体は熱をうけた為か赤褐色を呈すが、ひび割れ等は見受けられない。中央部がやや凹む。



9. 堪穴住居跡(北より)



10. 壺穴住居跡実測図(1/60)



11. 壺穴住居跡出土遺物

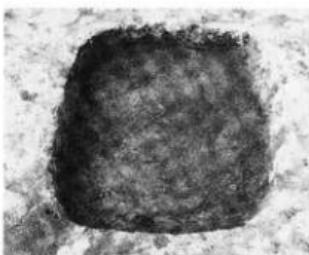
② 土塙

アカホヤ層上面において多数の土塙を検出したが、そのほとんどが不定形のものであった。いずれも遺物は出土しておらず機能等は不明である。今回はその内のG区の土塙3基を取り上げる。

1号土塙は、G区の中央のやや西寄りに位置する。平面は長方形で、東西方向に主軸を持つ。長軸長1.9m、短軸長0.6m、深さ0.85mを測る。底部には直径10cm、深さ8~32cm程のピットが中央に並んで2ヶ所、両端に1ヶ所ずつ掘られていた。出土遺物はない。埋土はⅢ層(黒色土)である。

2号土塙はG区中央部のやや南端で検出した。平面は隅丸方形を呈し、東西方向が若干長い。長軸長1.15m、短軸長1m、深さ0.18mを測る。出土遺物はない。埋土はⅡ層(茶褐色土)である。

3号土塙は、G区の中央のやや東寄りに位置する。平面は長方形で南北方向に主軸を持つ。長軸長1.4m、短軸長0.6m、深さ0.7mを測る。中位に焼土の堆積が見られた。また、底部には直径10cm、深さ11~40cm程のピットが中央に並んで2ヶ所、やや離れて1ヶ所掘られていたが、反対側にも対応するピットがあると思われる。出土遺物はない。埋土はⅢ層(黒色土)である。



上から 12. 1号土塙(東から)

13. 2号土塙(西から)

14. 3号土塙(西から)

③ 焼土

各区ともⅢ層上面において焼土集中部が数ヶ所検出された。かなり広範囲に焼土がうすく堆積するタイプのものと、ある程度狭い範囲にかなり厚く集中して堆積するものがある。

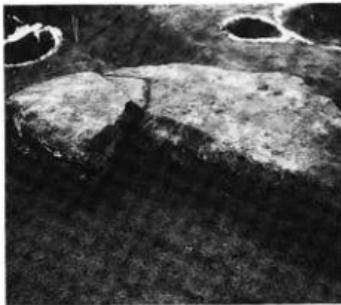
15はH区のほぼ中央部で検出された焼土である。長軸長30cm、短軸長20cm、厚さ10cm程の不定形の凝灰岩礫の周囲に焼土が集中する。大きさは1m程で、中央部での厚さは約12cmである。

④ 祭祀遺構

1-H区で祭祀遺構が4ヶ所集中して検出された。周辺のアカホヤ層はかなり搅乱を受けている。1号祭祀遺構は白い砂質土を薄く敷き、その上に2~3cmの偏平な円盤状の土製品と古銭及び小砂利を寄せたものである。砂質土には焼土塊が含まれる。古銭は全て洪武通宝で約70枚出土したが、質は良くなく大きさもまちまちである。土製品はローラムを直径2~3cm、厚さ約1cmの円盤状に固めたものである。かなり脆い。また、南東にある程度まとめて置いているようである。

2号祭祀遺構は20~30cmの偏平な円盤を直径1.5m、深さ30cm程の円形の土塙に敷き詰めたものである。北側には焼土の集中がみられる。焼土を除去すると幅50cm程の溝があり、不定形な土塙と繋がる。溝及び土塙の中には遺物等は無かった。

3号祭祀遺構は長軸長約2m、短軸長1.2m、深さ30cmの楕円形の土塙に小砂利を大量に敷き詰めたものである。土塙と小砂利塊の間に10cm程の隙間があり、ややバサつく黒



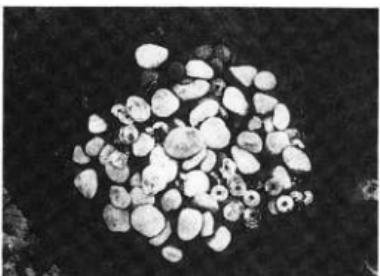
15. 焼土(南より)



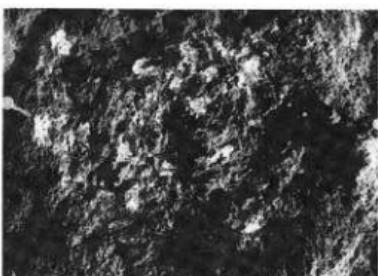
16. 祭祀遺構(西より)

色土が詰まっている。明銭等の遺物は無かった。

4号祭祀遺構は、薄い木の皮（種類は調査中）の周囲に38枚程の古銭と小砂利が寄せ集まつたもので土塙等は無い。木皮に墨書きや加工等は見られなかった。古銭は1号祭祀遺構の洪武通宝のように質は良くない。また、全体の大きさや穴の太さもまちまちで文字も見られない。



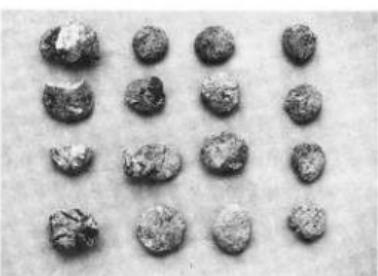
17. 1号祭祀遺構検出状況



20. 同 白色砂質土検出状況



18. 同 土製品出土状況



21. 1号祭祀遺構出土土製品



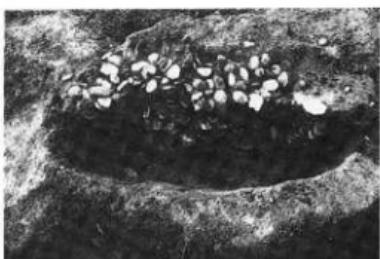
19. 同 拡大



22. 1号祭祀遺構出土明銭



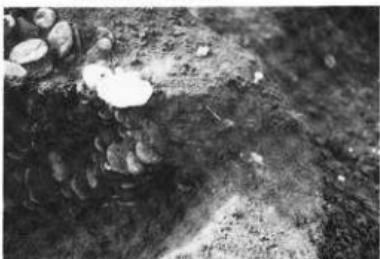
23. 2号祭祀遺構検出状況



27. 同 半截状況



24. 同 半截状況



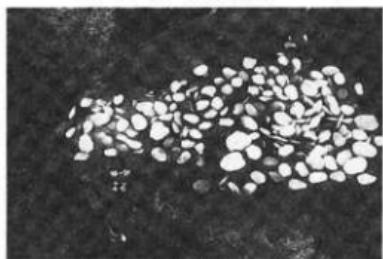
28. 同 断面部拡大



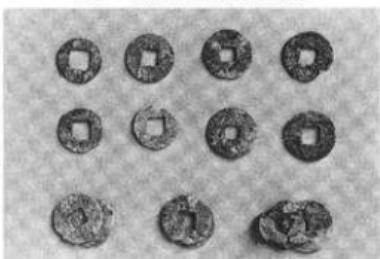
25. 同 焼土部分拡大



29. 4号祭祀遺構検出状況



26. 3号祭祀遺構検出状況



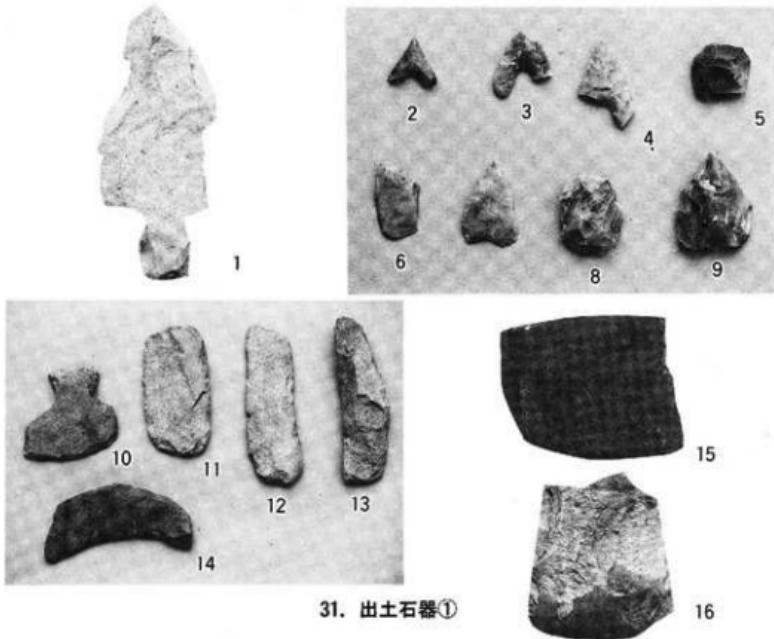
30. 4号祭祀遺構出土明錢

4. 遺物

① 石器 (31~33参照)

1は剥片尖頭器である。打面を有す。尖端部は主要剥離面側から折れている。両辺の下部に使用痕が、左辺上部にはノッチ状の加工が観察される。2~4はチャート製の石鎌である。3は鍬形鎌である。5~8はチャート製の小形石器である。5~8はスクレイバーと思われる。5と6には折断技法が見られる。7は石鎌もしくは石錐の機能も考えられる。主要剥離面が残り、三角形の剥片の周縁には細かい加工が施されている。8は肉厚でかなり加工が荒いスクレイバーである。9は尖頭状石器であるが、尖端部の状況から錐としても利用されたと思われる。

10~14は砂岩製の打製石器である。10は石匙と思われる。片面に自然面が残り加工も荒い。11は打製石斧と思われるが全周に細かい加工が見られることから、スクレイバーとして利用されたとも思われる。13も打製石斧と思われる。刃部には歯こぼれが観察される。12は自然面が残り周縁に荒い加工が施されること等から未製品と思われる。14は石鎌と思われる。刃部は内湾し、内湾部と両端部には細かい加工が見られる。使用痕が若干観察される。

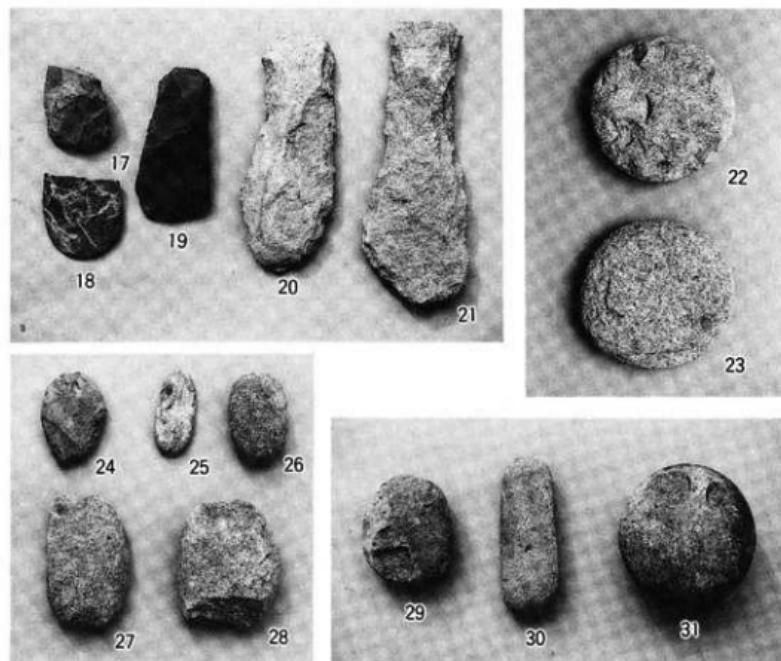


31. 出土石器①

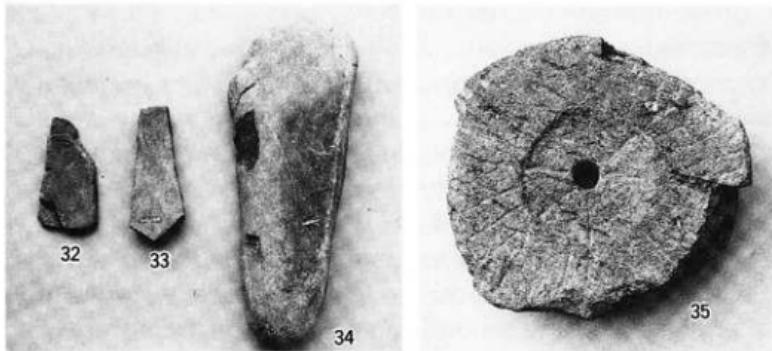
15はかなり研磨されている。砥石ではないかとの指摘もあったが、全体の加工の状況や刃部に見られる歯こぼれなどから、石包丁の残欠ではないかと思われる。16は全体を荒く加工したのち、刃部を丁寧に研磨した磨製石斧である。両側辺にも磨痕が見られる。17は打製石斧である。かなり肉厚で一部に磨痕が見られる。18は扁平な磨製石斧で、丸い刃部には入念な研磨が施されている。19は全面を研磨した石斧である。刃部には著しい歯こぼれが見られる。20と21は扁平打製石斧である。本遺跡では完形の扁平打製石斧が30本出土している。

24~28は石錐である。切れ目石錐(25・26)には研磨痕が見られる。29~30は敲打器である。29には全面に30には両端に敲打痕がある。29の両面は磨石として利用されている。31は全面が磨滅している磨石である。火を受けている。2ヶ所に剥落が見られる。

32~34は砥石である。32と33は熱を受けている。32は両面を33は片面を使用している。34は側面と両面を利用している。片面は凹む。35は凝灰岩製の石臼である。中央部が若干凹む。溝は8分画を意識したと思われるが、かなり雑に掘られている。



32. 出土石器②



33. 出土石器③

[凡例] 滅・流紋岩 チ・チャート 磨・砂岩 貝・貝殻 緑・緑色岩 烏・粘板岩 木・木ルンフェルス 花・花崗岩 砂・砂灰岩

No	出土区	層位	器種	最大長 [cm]	最大幅 [cm]	最大厚 [cm]	重さ [g]	石材	備考
1	I-H 区東	VI	剥片尖頭器	9.4	4	1.1	35	流	先端部欠損、打面を有す、左辺部にナットあり
2	I-H	V	石鑿(圓基式)	1.7	1.6	0.4	0.6	チ	完形
3	I-H	V	石鑿(圓基式)	2.1	1.8	0.3	1	チ	尖端・脚部欠損
4	I-H	V	石鑿(圓基式)	2.8	1.7	0.4	1.5	チ	脚部欠損
5	I-H	V	スクレイバー	1.8	1.6	0.7	3.1	チ	半分に折られている
6	I-H	V	スクレイバー	2.6	1.7	0.3	1.5	チ	一部欠損
7	I-H	V	石鑿(圓基式)	2.5	1.4	0.3	1.5	チ	完形品、石鑿(?)
8	I-H	V	スクレイバー	2.6	2	0.9	5.4	チ	完形品、円形器(?)
9	I-H	V	尖頭状石器	3.1	2.4	0.9	7.1	チ	完形品、石鑿(?)
10	I-G	III	石匙(?)	7.8	7.5	0.9	58	砂	打削整形、半面に自然面
11	I区表接	-	打製石斧(?)	10.6	5.4	1	93	綠	打削整形、一部自然面
12	I-D	III	打製石器	13.5	3.8	2	115	砂	"
13	I-G	III	打製石斧(?)	13.1	4.3	1.2	85	砂	打削整形、バ(?)
14	I-A	III	石鍬(?)	12	4.3	1	85	砂	打削整形、内両端と両端部に細かい溝整
15	I-A	III	石包丁(?)	5.1	4.1	0.6	22	粘	残欠、砥石か?
16	2-B	-	局磨削石斧	4.8	3.7	1.3	30.7	ホ	残欠、打削整形のうち研磨(刃部に集中)
17	I区表接	-	打製石斧	5.1	4.1	2.2	62	真	残欠、一部研磨
18	I-D	III	磨製石斧	5.1	5	1.1	42	真	半分欠損、荒い研磨、先端部に丁寧な研磨
19	表接	-	磨製石斧	9.9	4.8	1.4	92	真	打削整形のうち研磨
20	2-A	III	扁平打製石斧	15.7	6	1.2	162	砂	平面に自然面が残る
21	2-A	III	扁平打製石斧	18.2	6.5	1.6	250	砂	一部自然面
22	1-D	III	円形石器	9	9	1.7	238	花	打削整形のうち一部研磨、両面自然面
23	1-D	III	円形石器	9.5	9.4	1.7	250	花	"
24	I-H	II	石鍬	5.8	4.2	1.2	49	砂	両端打欠
25	I-A	II	"	5.5	2.5	0.8	18.6	真	両端切れ目、一部研磨
26	I-G	II	"	5.9	3.8	1.8	70	砂	"、研磨
27	I-H	II	"	8.2	5.4	1.8	140	砂	両端打欠
28	I-H	II	"	8.4	6.6	2.6	222	砂	"
29	I-C	III	蔽打石	7.2	6.2	3.2	190	砂	成形のうち打石として利用(一部磨痕)
30	I-C	III	"	10.8	4	2.4	162	砂	両端利用
31	I-A	III	磨石	9.6	8.5	5.8	690	花	受熱、表面磨耗
32	I-A	II	砥石	7.5	4	0.8	41	砂	受熱、二面使用
33	I-A	II	砥石	9.5	3.6	2.6	80	砂	"、片面使用
34	I-F	II	砥石	22.3	8.2	4.5	1198	砂	三面使用、端部に打痕(内一面は凹む)
35	表接	-	石臼	29.5	27.5	12.3	1333	凝	丸穴、底面は荒い加工

34. 石器計測表

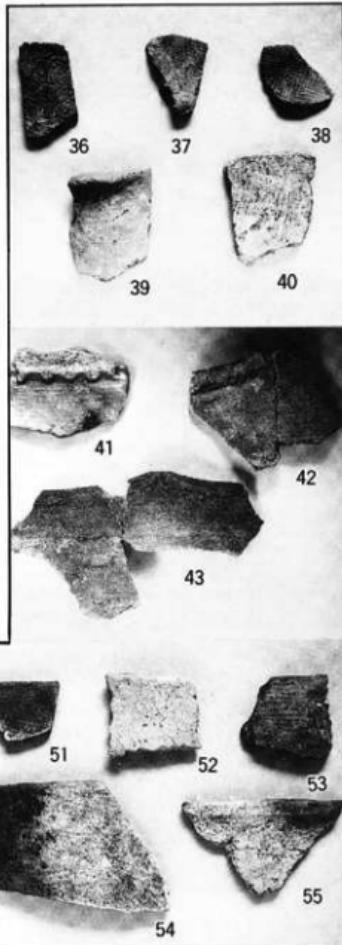
② 土器 (35~38参照)

36~40は1-H区のV層から出土した縄文時代早期の土器である。36~38は押型文土器である。36は山形を横方向に、38は縦方向に施文している。36の口縁部には棒状工具による刻目が入り細かい波状になっている。39は無文の口縁部片である。口縁端部はかなり外へ反る。40は撚糸文土器の胴部片である。

41~55は縄文時代晚期の粗製の深鉢片である。41には突帯に刻目が入る土器である。42~43は波状口縁を呈す。42は口縁部がラッパ状に開き、43はやや内傾する。44~50は凸帯文を有する口縁部片である。51・53~55は条痕による荒い調整がみられる土器である。51と55はさらにナデが施され、条痕の残りはよくない。52は無文土器である。

56~64は縄文時代晚期の精製磨研土器の浅鉢片である。58の類例は大分県大野郡緒方町大石遺跡から出土している。61と62は口縁部がラッパ状に開く。62は荒い研磨でかなりの剥落が見られる。63は口唇部を若干外につまみ出すタイプの浅鉢で研磨は粗い。64はその底部と思われる。底部は若干干あげ底気味である。

65~70はその他の形式不明の縄文土器である。65と66の類例は町内の笠下下原遺跡でも出土している。裏側には貝殻条痕による調整が見られ



35. 縄文土器(押型文・凸帯文 他)

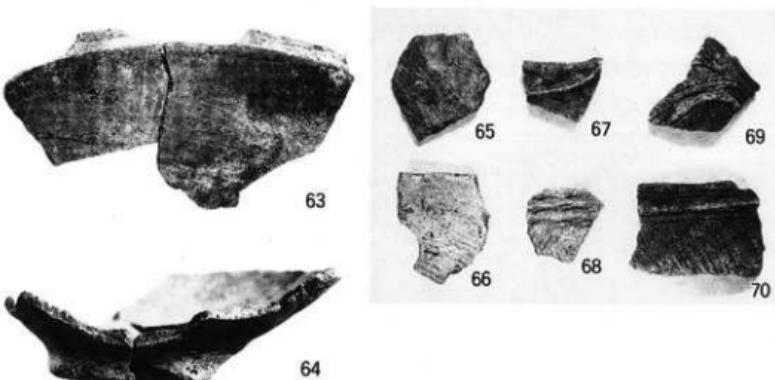
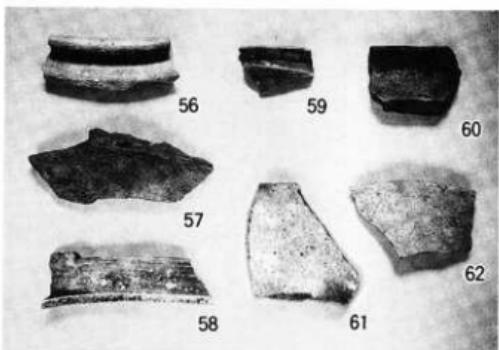
る。中期と思われる。67は波状口縁になると思われる土器片である。内外面とも丁寧なナデが施される。68は貝殻压痕文を横方向に連続して施文している土器である。裏側には貝殻条痕による調整が行なわれている。

69は曲線状の突帯の周囲に細線を施すものである。70は口縁部下に突帯をつけ、その上下に2条の細線が巡る土器である。胎土その他技法的にも69に似ている。胴部には斜方向に荒い条痕が施されている。

71～76は縄文土器の底部である。71と72は精製磨研土器の底部、75と76は粗製深鉢の底部と思われる。73は小型の鉢の底部と思われる。端部近くに溝が一条巡る。74はミニ

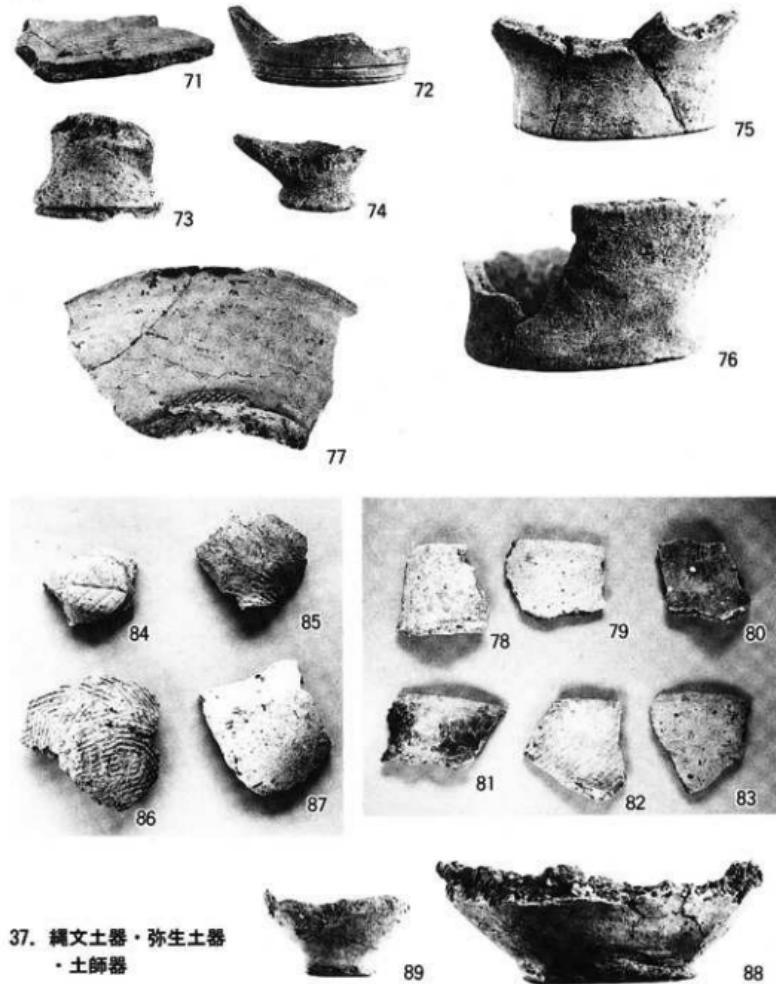
チュア土器の底部と思われる。

77は弥生時代後期の二重口縁壺片である。端部は剥落して無い。78は高杯片である。朱が部分的に観察される。79は広口壺の広口縁部片である。80は甌の口縁部片である。若干ハケ目が残る。81と82はタタキ痕の残る壺の口縁部である。83は鉢の口縁部である。タタキ痕が残る。



36. 縄文土器(黒色磨研、その他)

84～89は土師器の底部である。84の底部には木の葉痕が残る。85は鉢の底部と思われる。わずかにタタキ痕が残る。86～88は壺の底部である。86にはタタキ痕が残る。87にはわずかに稜が残る。古墳時代の後期頃の所産と思われる。88は器壁がかなり厚い。タタキ痕がわずかに残る。89はミニチュア土器の底部と思われる。くびれ部には調整時についたと思われる爪痕が数ヶ所残る。



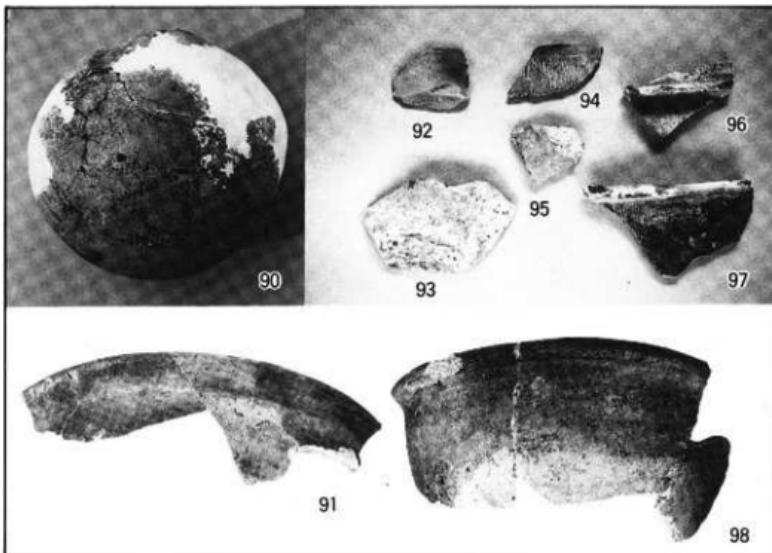
37. 繩文土器・弥生土器
・土師器

90は丸底壺である。頸部から口縁部を欠く。全体は丁寧に研磨されている。91と97は壺の口縁部である。91は焼成が極めて良い。調整は両方ともハケ目であるが91の方が丁寧である。92と93は土師皿の底部である。93は糸切り底である。焼成は悪い。94と95はすり鉢片である。96は鉢釜の口縁部片である。98は口径30cm程の鍋である。口縁部の屈曲は明瞭である。内外面ともにナデ調整であるが、胴部にはハケ目が残る。胎土に雲母片が含まれている。

③ その他の遺物 (39~41参照)

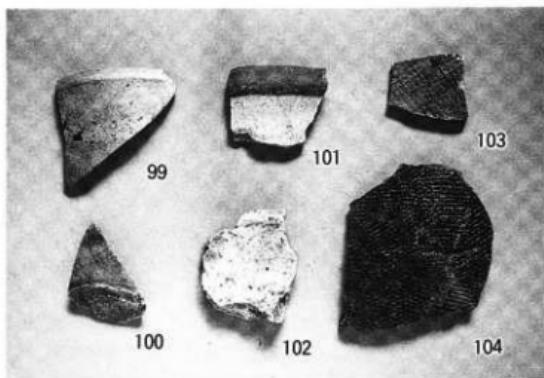
99~104は須恵器である。99は鉢の口縁部、100はその底部と思われる。101はすり鉢の口縁部と思われる。102は壺の口縁部である。端部は若干凹む。103と104はタタキ痕の残る壺の胴部片である。104には一部自然釉が見られる。105~106はすり鉢片である。106の口縁端部には自然釉が見られる。107~110は土錘である。本遺跡での出土量は多くない。111~112は中世のすり鉢片である。

113~120は青磁碗片である。113と114には劍先連弁が見られる。116と117は口縁部が内傾する。119と120は端反りの碗である。121は青花碗片である。火熱を受けていると思われる。122と123は青磁の穂花皿である。124は国産陶器の皿である。高台部分は無釉である。

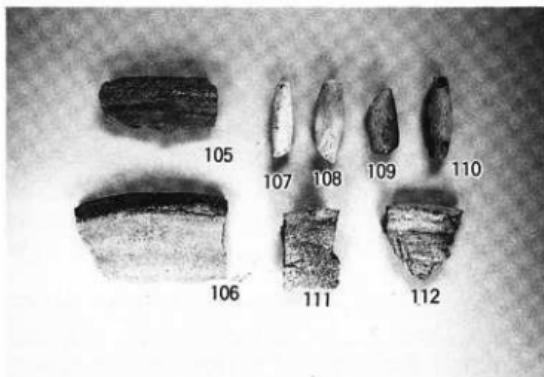


38. 土師器

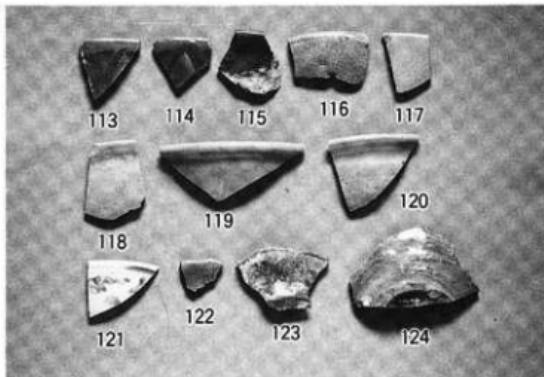
39. 須恵器



40. 土錐他



41. 陶磁器類



III. おわりに

五ヶ瀬川北岸における本遺跡の発掘調査は、昭和41年に鈴木重治氏によって行われた菅原洞穴に次ぐものである。遺跡の大部分は、昭和30年代後半から始った開墾や造成の影響を受けて消滅していたと思われたが、調査の結果、遺構では中世の祭祀遺構4基、古墳時代の竪穴住居跡1基の他多数の柱穴・土塙・焼土群を検出した。遺物は中・近世、縄文時代早期・中期、旧石器時代の遺物が若干出土しているが、そのほとんどは縄文時代晚期の石器や土器で占められる。

中世では、I・II区で4基集中して検出された祭祀遺構が注目される。対岸の笠下遺跡でも同様な遺構が検出されている^{注1}。小砂利と明錢が伴う点では共通するが、①白色砂質土の有無、②古錢を伴わない例がある、③数種類か一種類の古錢のみを埋納するかの差がある、④焼土の有無、⑤人頭大の扁平な河原石の有無、⑥獸骨やすり鉢の有無等いくつかの相違点がみられる。県下でもこのような類例が少なく、遺構の性格も地鎮あるいは供養等に伴うものではないかとされているが、詳細は不明である。その他、量的にも少なく遺構に伴っていないが、当地域で初めて12~13世紀頃のものと思われる土師器や須恵器が出土しており注目される。

竪穴住居跡は僅かに1基のみの検出であったが、五ヶ瀬川の北岸で検出された町内唯一の例である。出土遺物より古墳時代の前期頃と思われる。傾斜地を削ってフラットな床面を作ったためか、速日峰地区遺跡のII区で検出された竪穴住居跡ほどではないにしろ、南側の壁が北側に比べてかなり深くなっている^{注2}。また、中央部から北側にかけてベット状遺構と思われる高まりがあるが、中央部に花崗岩製の巨礫が据えられているために、その部分が凹む。本町ではこのようなベッド状遺構をもつ竪穴住居跡の検出例は初めてであり、類例の増加が待たれる。

縄文時代では遺構は検出されなかったが、アカホヤ層より焼け石がまばらに出土しており、集石遺構の存在も予想される。遺物では、早期・前期の土器が若干見られるものの、大部分がIII層中より出土した晩期の土器・石器で占められる。特に粗製深鉢片と砂岩製の剥片及び打製石器（扁平打製石斧等）の多さは、生業の一端を垣間見るようで興味深い。

旧石器時代の剥片先頭器は、かなり不定形な縱長の剥片が利用されている。ノッチ状の加工や両辺下部に見られる加工痕や使用痕等から、先端部が欠損したためスクリイバーとして再利用されたものと思われる。剥片先頭器ではないが、石器にノッチ状の加工を入れたり、鏝齒状に加工を施す石器は、延岡市の片田遺跡や町内の矢野原遺跡あるいは熊本県狸谷遺跡の資料にも散見される^{注3}。

今回の調査は谷部のごく限られた範囲で行われたものであり、周辺（特に台地部分）にはまだかなり多くの集落や墓地の存在が予想される。今後、遺跡の確認を含めその対応には十分な注意が必要である。

注1 北方町教育委員会『笠下遺跡』(1990)

注2 北方町教育委員会『速日峰地区遺跡』(1991)

注3 京都文化博物館山下秀樹氏の御教示による。